

私の考えるバラの育種

株式会社ペレニアル

河合伸志

バラの育種の歴史

バラという植物の辿ってきた道は、大変にドラマティックなものであることは、多くの方がご存知のことでしょう。その歴史を遡ると、2000年を超える長大なものであり、バラは人類と共に園芸植物として進化してきたと言っても、過言ではないかもしれません。初期は香料や薬用としての利用を目的に栽培されていましたが、後に観賞用植物として栽培されるようになり、古代ギリシア・ローマ時代にはその美しさが大いに賞賛されていました。中世では一時的にバラの存在を否定した時期もありましたが、ルネッサンス期以降の近現代ではより一層人気が増し、現在でも世界規模で人気のある園芸植物となっています。

前記のヨーロッパでの流れとは別に、中国では独自に古い時代より園芸化がされていました。宋の時代には園芸品種が多数存在し、清の時代には剣弁高芯型の花形も存在したとも言われています。これらの「東洋のバラ」は、18～19世紀にかけてヨーロッパに持ち込まれ、四季咲き性やティーの芳香（香茶の香り）、剣弁高芯咲きの性質、色変わりの花色など、モダン・ローズの重要な形質を「西洋のバラ」にもたらしめます。この「東洋のバラ」と「西洋のバラ」の出会いはバラの歴史上で最もセンセーショナルな出来事と言えます。

「東洋のバラ」がヨーロッパにもたらされた頃、フランスではナポレオンの皇后ジョゼフィーヌがバラを収集し、彼女の庇護の元に多くの園芸家が育っていき、今日のバラの礎を築くこととなります。19世紀後半になると人工交配が盛んに行われるようになり、より多くの園芸品種が誕生し始めます。2回の世界大戦の終了後は、育種のスピードはさらに加速を増し、今日では世界各国のブリーダーによって、毎年のように新しい品種が多数誕生しています。その結果、バラは野生種からは想像がつかないほど姿を変え、モダン・ローズには野生種には存在しない花色、花型、香り、樹

形、開花習性などを持つ品種が多数存在することとなりました。

さて、前記のように長期間に渡って多くの人々が改良を重ねてきたバラは、既に完成の域に達して、もはやこれ以上の改良の余地が残されていないのではないかと、思われる方がいるかもしれません。しかし、実際のところは、完成にはほど遠いものであり、未完成な領域が多数存在しているのが現状です。大きな視点から見れば、黒点病にもウドンコ病にも完全に罹病しない品種は存在せず、またトゲがあることは未だにバラでは当たり前のこととされています。さらにより細かな視点で見れば、濃黄色の品種には花弁数の多い品種が存在しないことや、強香を放つ修景用の品種など、未完成な領域は数多く存在していると言えます。このように完成途中であるバラの育種において、私は以下のような考え方で育種を行っています。

「禅ローズ」に思いを託す

日本の歴史を振り返ってみた時に、私達日本人は海外より優れた文化を導入しては、常にそれらを独自性の高い日本流に改変し、より崇高なものへと昇華させてきました。私達が日常使う日本語はその代表的な例であり、漢字からかな文字を生み出し、今では英語も上手に取り入れています。言葉の他にも建築や料理、音楽といった分野でも、同様の現象が見られます。

ではバラに関してはどうかというと、日本にモダン・ローズがもたらされて既に100年以上の月日が経過していますが、未だに一方向的に西洋から導入するのみの状況が続いています。バラは他の分野に比べて遅れているのではないかと、私は思いました。だからこそ、西洋を中心に改良をされてきたバラを「日本人ならではの視点で捉えて、日本の持つ価値観を重要視して選抜を行いたい」、徐々にそういう風に考えるようになりました。

私は自分の品種群を「禅ローズ」というブランド名

で呼んでいて、それらにはこのような思いがあつてのことなのです。私は「禅ローズ」を現在3つのカテゴリーに分け、それぞれに目標を設定して改良を行っています。

「禅ローズ ～彩り～」

1つ目のカテゴリーは「禅ローズ ～彩り～」になります。野生種が複雑に交雑されて誕生したモダン・ローズには、前記のようにそもそもの野生種には見られないような色合いのバラが存在します。「禅ローズ ～彩り～」のカテゴリーでは、それらの色合いの中から、日本の伝統的な色調を持つバラを選抜しています。この分野の色合いは、近年でこそ人気があり、品種数が増加してきたものの、まだまだバリエーションが少ないのが現状です。現在はこれらのバリエーション（花型や樹形など）を拡大させることと、栽培性の向上（耐病性や樹勢の強さなど）を目指して交配を行っています。「禅ローズ ～彩り～」の代表品種としては以下のようなものがあります。



禅 [ぜん] (フロリバンダ系)

このカテゴリーの象徴的な品種で、茶と紫が複雑に入れ乱れます。ティー系の心地良い香りがあります。



涼 [りょう] (フロリバンダ系)

ラヴェンダー色のセミダブル咲きで、多花性です。鉢や花壇でのパフォーマンスに優れた品種で、ブルー系の淡い香りがあります。



一葉 [いちよう] (フロリバンダ系)

バラには数少ない淡い黄緑色で、花色が安定した品種です。現在、自作の中では最も人気があります。



チャーリー・ブラウン (ミニチュア系)

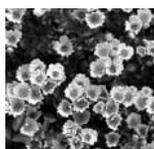
代表品種の1つで、ひらひらとした茶色の花卉が美しく、絶え間なく開花します。枝変わりに黄土色～琥珀色の「チャーリー・アンバー」があります。



クール・ビューティ (ミニチュア系)
ミニチュア系では珍しい青味のある美しいラヴェンダー色です。ブルー系の淡い香りがあります。

「禅ローズ ～趣き～」

2つ目のカテゴリーは「禅ローズ ～趣き～」です。人の手を借りずとも大自然の中で遅く育ち、季節になると花を咲かせる野生のバラは、実に美しいものです。野生のバラには日本人が古くより慣れ親しんできた山野の花々がもつ美しさがあり、それらの美にモダン・ローズの多様性を取り入れたのが「禅ローズ ～趣き～」です。このグループの品種は、小輪多花性で耐病性をもつ品種が多く見られ、しなやかなSTEMが描く曲線美も魅力的です。現在、これらのカテゴリーでは、黄色・オレンジ系の品種の開発や、花形のバリエーションの拡大、芳香性の導入などを目指しています。「禅ローズ ～趣き～」の代表品種としては以下のようなものがあります。



天の川21st [あまのがわ21st] (クライミング・ミニチュア)

ヤクシマイバラの子で、黄色の一重小輪咲きです。匍匐性で、真のグラント・カバーとして利用できる唯一の黄色系品種です。



ミス・カズコ (ミニチュア)

花径1cmのマイクロ・ミニで、株を覆うように花を咲かせます。絶え間なく花を咲かせ、小鉢や苔玉栽培にも向きます。



伽羅奢 [がらしゃ] (クライミング・ミニチュア)

淡い桃色のセミダブル咲きで、しなやかな枝にこぼれるように花を咲かせます。四季咲き性で、ローズ・ヒップも美しいです。

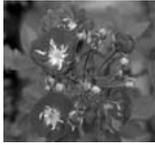
ロゼ・ダンジュ (シュラブ)

ローズ色のポンポン咲きで、開花と共に色が淡くなるので、満開の時は2色咲きのように見えます。多くの賞を受賞した品種で、次々と花を咲かせます。



おりひめ (シュラブ)

可憐なピンク色のポンポン咲きで、花径2cmの小輪花を多数咲かせます。四季咲き性があり、繰り返し開花します。



ひこぼし (シュラブ)

赤紫色のポンポン咲きで、修景用のバラとしては珍しい色合いです。四季咲き性があり、繰り返し開花します。

「禅ローズ ～華～」

最後のカテゴリーが「禅ローズ ～華～」になります。「華麗なる花」というのが、従来の西洋のバラに抱く最も一般的なイメージではないでしょうか。そうした従来の西洋のバラがもつ価値観に準じて、日本人である私が選抜したバラが「禅ローズ ～華～」です。花一輪が持つ美しさをはじめ、ガーデンへの植栽や鉢栽培でのパフォーマンスを重要視したバラです。現在はこれらのカテゴリーでは、耐病性の強化、強い芳香などを目指して改良を行っています。「禅ローズ ～華～」の代表品種としては以下のようなものがあります。



ウィンド・ソング (ラージ・フラワー・クライマー)

アプリコット色の蕾から白色に変わる一重咲きの中輪咲きで、樹勢がとても強く、黒点病にも強い育てやすい品種です。学生時代の選抜個体です。



デライト (シュラブ)

サーモン・ピンクの丸弁咲きで、花にリンゴのような良い香りがあります。樹勢がとても強く、耐病性があり育てやすい品種です。学生時代の選抜個体です。



ハイジ (ミニチュア)

白にくっきりとしたピンクの覆輪で、整った丸弁の花を咲かせます。多花性で華やかな印象です。



ミセス・トシコ (ミニチュア)

淡い桃色の整った剣弁高芯咲きです。株のまとまりがとても良く、理想的な株型に生育します。

こだわりをもった育種を

前記のように、私は「こだわり」をもって育種を行っていますが、近年はこのように独白色を打ち出すブリーダーが少なくなりつつあります。以前、各国のブリーダー達は皆それぞれお家芸というのを持っており、オリジナリティー溢れる品種を作出していました。その最も分かりやすい事例が、イングリッシュ・ローズを作出し続けているデビッド・オースチン氏です。イングリッシュ・ローズが世に登場した頃は、全くというほど世の中で認められず、オースチン氏は長い間「いばらの道」を進むこととなります。70年代後半～80年代前半より、イングリッシュ・ローズはようやく表舞台に立つことができるようになり、現在では世界的な人気となりました。育種家の「こだわり」が最も理想的な形で実を結んだ事例と言えるでしょう。

一方、イングリッシュ・ローズの世界的な人気に伴い、ここ数年は各国のブリーダー達が競うようにしてイングリッシュ・ローズに類似した雰囲気のパラを作出しています。商売として育種を行う以上、ある程度は仕方のないこととしても、中には代々素晴らしい品種を作出してきた育種家が、急速にコピー品種を作出する育種家になってしまったような事例もあります。どことなく寂しさを感じるのは私だけでしょうか…。

バラの人気が高いことの1つの要因は、この植物が比類なき多様性を持っていることではないかと、私は思っています。この多様性を生み出してきたのは、各ブリーダー達の持つ「こだわり＝魂」なのではないでしょうか。「お金は大切ではあるけれど、全てではないはず。魂を捨て去らないで欲しい…。」そう願いつつ、この文をしめたいと思います。

私の作出した品種は、(株)ペレニアル (千葉県松戸市新松戸4～65～1和光新松戸ビル4 F、TEL: 047-348-1231、FAX: 047-343-7650、URL <http://www.perennial.co.jp>) で取り扱っています。ご興味のある方は、ぜひお問い合わせください。

【参考文献】

- ・バラ大百科 (日本放送出版協会)
- ・百華目録2007秋～2008春 (株)ペレニアル)